大 館 歴 ま ち 散 歩

―巨木が語る信仰と歴史の謎を解く―

1. 日　　時　平成30年6月23日（土）13：00 ～
2. 主　　催　大館市 建設部 まちづくり課
3. 案 内 者　東北巨木調査研究会秋田支部長　五十嵐　洋
4. 集　　合　大館市桂城公園（武道館側駐車場）
5. 内　　容　市内で守られてきた巨木を巡り、守られた理由や、関連する地域の信仰や歴史を学ぶ。

主要 探訪ルート（途中の木や史跡も簡単に案内します）

桂城公園 13：00	～	桂城公園の大ヤナギ 13：00～13：30	～	別所大日神社の杉群 14：00～14：20
～	天空の松 14：40～15：40	～	出川の欅 16：10～16：30	～ 桂城公園 17：00

◎見学ガイド

巨木とは？

・環境省では、**「原則として、単幹で地上130cmの幹周り（目通幹周）が300cm以上の木」**を巨木ととして定義（ここでの地上とは、木の立ち上がりの周囲で一番高い地面のこと）
・株立の場合、一番太い幹が200cm以上あるもの。各幹周の合計を計測値とする（例外あり）

三頭木の条件とは？

・主幹が三股、あるいは株立ちで三本の木が意図的に残されている
・周囲の木が伐られても残され続け巨木となった
・神仏やいい伝えなど、信仰の痕跡がある
・聖地と判断できる場所にある
　※　桜やカエデ（モミジ）のように、もともと三股に分かれやすい樹種もあるので注意

１．　巨木から解く地域の謎

今回は、市内でもよく知られている巨木を巡り、三股の巨木信仰の謎と、巨木の絡んだ歴史の謎という2つの謎の解明に挑みたい。

謎1.　桂城公園のシロヤナギ（幹周全国2位）はどこから来たのか？
謎2.　北鹿地域に三つ股の巨木（三頭木）がなぜ残されたのか？

２．　桂城公園の大ヤナギ（全国2位・県内最大のシロヤナギ）

（左）花見の時期のシロヤナギの様子

（右）市民の憩いの場となった大柳の見事にねじれた幹

〈案内板〉
樹種名　日本最大級のシロヤナギ
樹　齢　２００年（推定）
樹　高　21メートル
胸　高　直径180センチメートル
　　幹周5.7メートル
　明治35年、大館城本丸跡地に、大館高等小学校が建設された際、当時の校長であった神谷勇三氏が、風による砂ぼこりを防ぐために、シロヤナギを移植したものです。生徒たちから「大柳」という名で親しまれておりました。　　「桂城小学校百周年記念誌」より　ー中略ー
平成18年8月　「国際ソロプチミスト大館」寄贈

　長い間エゾヤナギだと思われていたが、東北巨木調査研究会による調査の際、顧問でもある弘前大学の石田清准教授（農学生命科学部生物学科）が、シロヤナギではないかとして菊地賢氏（森林総合研究所 樹木分子遺伝研究領域 主任研究員 ）に依頼しシロヤナギと同定された。
　同研究会で平成22年（2010）9月に計測し全国で2番めのシロヤナギと判明したことから、翌年8月に環境省の『巨樹・巨木データベース』に登録した。幹周約5.8mは、『津谷の大ヤナギ（最上郡戸沢村津谷）』の7.7mに次ぐもの。
　案内板から気づく点としては、以前『エゾヤナギ』となっていた箇所が『シロヤナギ』に、樹高が22mから21mに、幹周が5.3mから5.7mに近年差し替えられている。つまり、桂城小百周年記念誌に掲載された時点ではシロヤナギという名ではなかったこと、つまりシロヤナギと思って植えられたわけではなかったことがわかる。
　大館桂城小学校の歴史を確認すると、「明治35年に、大館尋常小学校と大館高等小学校とが合併し大館高等尋常小学校（※正しくは尋常高等）となり、**41年に大館尋常小学校と大館高等小**

が分離し，高等小学校は旧城跡に新築，移転する」とある。5～6年で建て替えるはずがないため、これが正しいとすれば大館高等小学校が本丸跡に新築されたのは、建設に5年以上費やしたのでもない限り、**案内板の明治35年ではなく41（1908）年ということ**になる。

また、同校が現在の水門町に移転したのは昭和26（1951）年なので、ここに学び舎があったのは41年説では43年間となる。35年説をとっても校舎として用いられた期間が50年は超えていないことがわかる。

苗木として植えたのであれば、現在122歳となるが、その樹齢よりずっと大きく見えることや、案内板の「**移植した**」や、「**生徒たちから「大柳」という名で親しまれておりました**」という記述からしても、この本丸跡に持ってきた時点である程度大きな木であったことはあきらかである。

では、このシロヤナギはいったいどこから持って来たのだろうか。もしも戊辰戦争をくぐり抜け城内で焼け残っていたものを移植したのならば、唯一の生き証人という可能性もでてくるのだが、果たして城内にヤナギは植えられていたのだろうか？焼け残ることができたのだろうか？

それについては、本日の旅の最後にここに戻って来た時に謎を解くことにしたい。

◎ポイント

・植えたのではなく移植された（なぜ柳であったのか）
・移植時点ですでにある程度大きかった（立木の長距離の移動は困難）
・戊辰戦争で本丸内の建物や樹木はほぼ全域が焼失したと思われる

３．別所大日神社の杉群（三本マッカの杉）

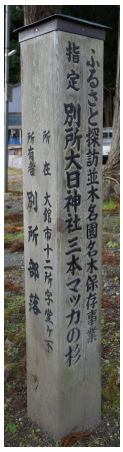
〈標柱〉
ふるさと探訪並木名園名木保存事業
指　　定　別所大日神社三本マッカの杉
推定樹齢　約四◯◯年
樹　　高　約二十メートル
所　　在　大館市十二所字堂ヶ下
所 有 者　別所部落

〈手書き説明板〉
赤鬼様は別所部落住民の入口の守神として、長い間、住民を見守って来ましたが、平成二十四年四月四日の低気圧による強風で倒壊しましたので祭典（新四月八日）に当り、急に創りました－中略－平成二十四年四月七日（修復）

1本が欠けてしまった三本マッカの杉

2007年、十和田湖北部の山中で、幹周6.1mという、単幹としては日本一という三股のブナ「森の神」が発見された。発見者の東北巨木調査研究会の高渕会長によると、案内したのは60年間山仕事をしてきたという樵（きこり）で、森の神は幹が三股に分かれていることから神が宿るとされ周囲の木が伐採された際にも伐られることなく残されたという―。以降、調査してみると同様の理由で三つ股に分かれた巨木が各地で確認され、「三頭木」という通称で呼ばれるようになった。

別所大日神社の三本マッカの杉は三本の杉が融合した株立ちと思われるが、現在一本が失われたため、その跡に若木を接（つ）いでいる。傍らには大館市内各所にある人形道祖神の中でもめずらしい顔を持たない「**赤鬼様（※鍾馗様）**」の祠もあり、同地域の個性的な信仰がうかがえる。



（左）境内には5m～6mの貴重な杉巨木群が残されている　（中）人形道祖神「赤鬼（鍾馗）様」　（右）標柱

これは三本マッカ杉の、おそらく枝などからとったコブを利用しており、神木そのものがショウキサマとして信仰されたことを意味する。

また、神社拝殿の前には、単木としては三本マッカを上回る、市内では最大級の幹周5m～6mの杉の巨木が数本残されており、貴重な巨木群が残る社叢である。

※【参考】平成20年発行『ニンギョ様を祀る』（著者：石田 眞　撮影：松山 尚）では「ショウキサマ」とある

4.　天空の松（県内最大のアカマツ―三頭木）

樹種名　アカマツ（県内最大級）
樹　齢　６００年（※推定）
樹　高　３１．０９m
幹　周　5.75m
※データはいずれも平成23年時点のもの
〈案内板〉
大滝温泉の“三頭木”天空の松
600年ほど前からこの地を見守ってきたアカマツは、1本の幹が2本になり、2本の幹が3本になり、それぞれの幹が太く高く天に向かって伸びています

全国公募された中から「天空の松」と名付けられたこのアカマツは、紹介されてからまだ10年を越えていない。蓬莱松や親松とも呼ばれたこれほどの木が知られずにいたのは、地元の山を知る限られた者しかたどり着けない場所にあったからだろう。

周囲に若い木しかないこの山中で、なぜこのマツだけがこうして巨木になることができたのかについては、先ほど谷をを2つほど隔てた別所の三本マッカ杉を見学して来た後ならば理解することができるだろう。では三頭木にはなぜ神が宿るとされたのだろう。

山の神の宿る三頭木だったため、伐られず残され成長し続けることができたのである。

市内には、こうした三頭木の巨木が他にも確認されている。

では三頭木にはなぜ神が宿るとされたのだろう。またなぜ『三』が尊ばれたのだろうか？

5.　聖なる数『三』

日本には、神道や仏教よりも古くから陰陽五行の思想が伝わり、生活に浸透している。奇数を陽数（縁起の良い数）として尊ぶのもそれで、1月1日や3月3日など、奇数の重なる節句や、七五三も奇数、三三九度に三三七拍子と徹底している。

中でも『三』へのこだわりは強く、御三家や三大何々というように、日本人は『三』でまとめることをとても好む。靴下は二足500円よりも三足1,000円のほうが売れるというデータさえある。われわれの暮らす世界は三次元であり、四脚よりも三脚のほうが凸凹の地形でも安定して立つように『三』は物理的にも安定している。

また、月日星（北極星）は三光と呼ばれ、出羽三山のように修験者にとっても『三』は特別な数であり、太平山の三吉大神は『さんきちさん』として親しまれている。さらに、人は誰もが三途の川を渡り彼岸（あの世）に向かうと信じられてきた。

北方を守護する帝釈天の三鈷杵、毘沙門天の三叉の鉾、不動明王の三鈷剣などにも見える三頭木には、さまざまな理由で崇敬の念が注がれたことだろう。

聖数として『三』を神聖視する思想は、修験の行者から木にかかわる者たちに受け継がれ、三股の木が神の宿る木として守られることにつながったのかもしれない。

6.　出川の欅

〈案内板〉
大館市指定天然記念物　　出川の欅（いでがわのけやき）
昭和五十三年三月十三日指定
所　在　地　大館市出川字上沢岱四十六の一
所有・管理者　出川部落
　村の言い伝えによると、この欅は樹齢千年を超え、小松源七という人が植えたもので、板沢八幡神社の欅と板子石山神社の欅と兄弟木であると言われています。
　大正時代の初め、所有者 佐藤東吉が「若木山大権現」という神の名をいただいて以来、部落の守護木として毎年旧暦四月八日に例祭が行われています―後略―
平成元年六月十日　大館市教育委員会

全国にはあきらかに巨木であるにもかかわらず、冒頭の計測基準にあてはめることができない木がある。そういう巨木のひとつが真中地区のシンボル『出川の欅』である。

まず、主幹がすでに朽ちてしまっており、生きようと横へ横へと伸びた太い根が丘の広範囲に広がり、規定の1.3mの目通幹周を測ることももはや無意味である。しかし、その前に立てば誰もが、これがただならぬ質量を持ち、長い年月をその身に刻んできた巨木であることを理解するだろう。

昭和50年ぐらいまでは主幹も空洞化しながらも生きており、下部にある大穴はまだ開いていな

かった。南小学校に統合される前の真中小学校の子どもたちの格好の遊び場で、上部にあった子どもしか入れない穴から中へ入り探検したり、コウモリを捕まえたりしたものである。

出川にはかつて佐藤家という大檀那があり、旅の途中で病んだ菅江真澄が長期滞在している。

安永四年（1775年）、隣の大披村で引欠川（ひかげがわ）の川岸から、915年の十和田噴火による平安時代の埋没家屋が見つかった際にもわざわざ見に訪れており、このケヤキを見なかったはずはない。

真澄は各地で珍木や巨木について所見を述べているのだが、なぜか『遊覧記』には、当時から巨木として知られていたはずのこのケヤキに関する記述は見当たらない。

近隣の板沢を訪れた記述も、『遊覧記』には富樫某の壺の絵しか載っていないが、肝入をつとめた五十嵐家に、歌会に参加するため二度も訪れた記録が残っていることから、真中地区について書かれた記録が一部分失われているように思われる。もしかしたら失われた遊覧記に当時の『出川の欅』についての記述があったのかもしれない。

また、1.5kmほど南東の杉沢地区の大子内村には、忠犬ハチ公の生家である齋藤家がある。ハチを大館駅から東京に送るために通ったのはこのケヤキの前の道であろうし、幼犬時代のハチが散歩でこのあたりまで来ていた可能性もあるだろう。この木は、長い間人々の暮らしを、ただここに在って見守り続けてきたのである。

自分で移動して新しい住処（すみか）をみつけることができる動物と違い、植物の多くは、そこに根付いたら、枯れるまでそこに居るしかない。

ここは嫌だからとか文句など言わず、そこで伸び、そこで咲き、そこで実を結び枯れるしかないのだ。ときには切り倒され、家屋や家具、もしかしたら船の材料や道具になることもあっただろう。

しかし、寝ぐらを変え落ちつくことのない一生を生きることが本当の幸せなのだろうか。ひとつところにしっかりと根を張り、枝を伸ばし実をつけ、暑い日には日陰をあたえ、雨の日には雨宿りになるようなこうした巨木に出逢うと、自然に畏敬の念が湧いてくるのはそういうことだ。

人は物言わぬ樹木を利用してきたが、いつの間にか彼らからも、沈黙や忍耐や、無償の奉仕とか、もしかしたら禅とか、そういうものを学んで来たのである、きっと。　（五十嵐）

7.　その他の巨木など（今回のルート上で説明します）

今回の主要探訪ルート上で、時間の都合上降車せず車内からの説明だけになりそうな巨木や史跡などについて簡単に紹介します。名称は仮称で順不同です。

柄沢日吉神社の門杉（柄沢山王岱）

三哲神社（十二所字中台）

曲田八幡神社の門杉と鎮守の森（曲田）

老犬神社（葛原）

吉成家の樅（モミ）（十二所字上城）

十二所神明社の夫婦杉（十二所）

扇田神明社の門杉と社叢（扇田）

長泉寺の大栗（扇田いとく裏）

猿子地蔵の柳（扇田町尻）

高村神明社の大ケヤキ（二井田高村）

本宮 熊野神社の杉（本宮熊ノ下）

舟場神社の大ケヤキー長寿の樹（根下戸舟場）

その他（写真なし）

・錦神社（二井田上出向）　・安藤昌益生家と墓（二井田贄ノ里）　・ハチ公生家（大子内）など

主要ルートマップ

桂城公園
出川の欅
天空の松
別所大日神社
大館市
ニプロハチ公ドーム
(大館樹海ドーム)
いとく樹海店
大館市立有浦小
秋田看護
福祉大
奥羽本線
二ツ山
総合公園
片山町三丁目
児童公園
長根山
運動公園
鳳凰山
象ケ倉山
大館市立総合病院
秋田犬会館
一心院
秋葉山
米代川
バイオ秋田工場
真中郵便局
秋田県立大館鳳鳴
高等学校定時制
高森
大館市立南中
アクロスプラザ大館南
黒滝
中山
十和田八幡平四季彩ライン
羽後二井田郵便局
老犬神社
鞍掛山
ニューロング工業(株)
扇田
達子森
大館市立扇田病院
市民の森
道の駅 ひない
比内鶏の里
秋田県立比内支援学校
大館カントリークラブ
大館市立比内中
大館市立西館小
秋田労災病院
三哲神社
大滝温泉
大日神社
養牛寺
若松コンクリート株式会社
薬師森
長者森
沢尻

【追加資料】

蛇柳（じゃやなぎ）の謎――大ヤナギはどこから来たのか

本丸跡に移植された大ヤナギがいったいどこから来たのかを解く重要な鍵となるヤナギが、公園内にもう1本だけひっそりと残された、龍神様の祠を守る『蛇柳（じゃやなぎ）』である。

大館史遊会会報「史遊」第3号（1991発行）に、『大館城内濠蛇柳』（工藤 智教―遍照院住職）とあり、

「桂城公園駐車場の東南方向（中城）に鉄柵に囲まれて柳の老木が立つ。地面から1.3m付近で二股に分かれ、太い部分の幹周りが3m、樹高は15mほどあろうか。土地の人はこの柳を『蛇やなぎ』と呼び、根元に龍神さまを祀る祠がある。

『大館舊記（※1）』の「大館奇怪の事共」の項に次の文がある。」

> 城濠蛇柳の事也昔には秋田藩と兄弟連根すといふ濠の内に大きな朱鯉が居ったと思ったらそれが朱蛇であったとか明治戊辰から己午と三ヶ年大館公の御共をして後昇天すとか。（**現在の蛇柳は二代目の柳**なり明治四十二年秋頃親株は一夜の大嵐のために折られたるを拙者（**※2**）大館小學校に俸職中保護して現在に至らしむ）

※1　舊は旧の旧字体。『大館舊記1』中村賎雄編集（昭和五年九月十一日）
※2　拙者とは、引用の『大館舊記1』編者である中村賎雄さんのこと

工藤住職は、蛇柳は1本ではなく堀周辺に幾本かあったようだと推測しておられる。

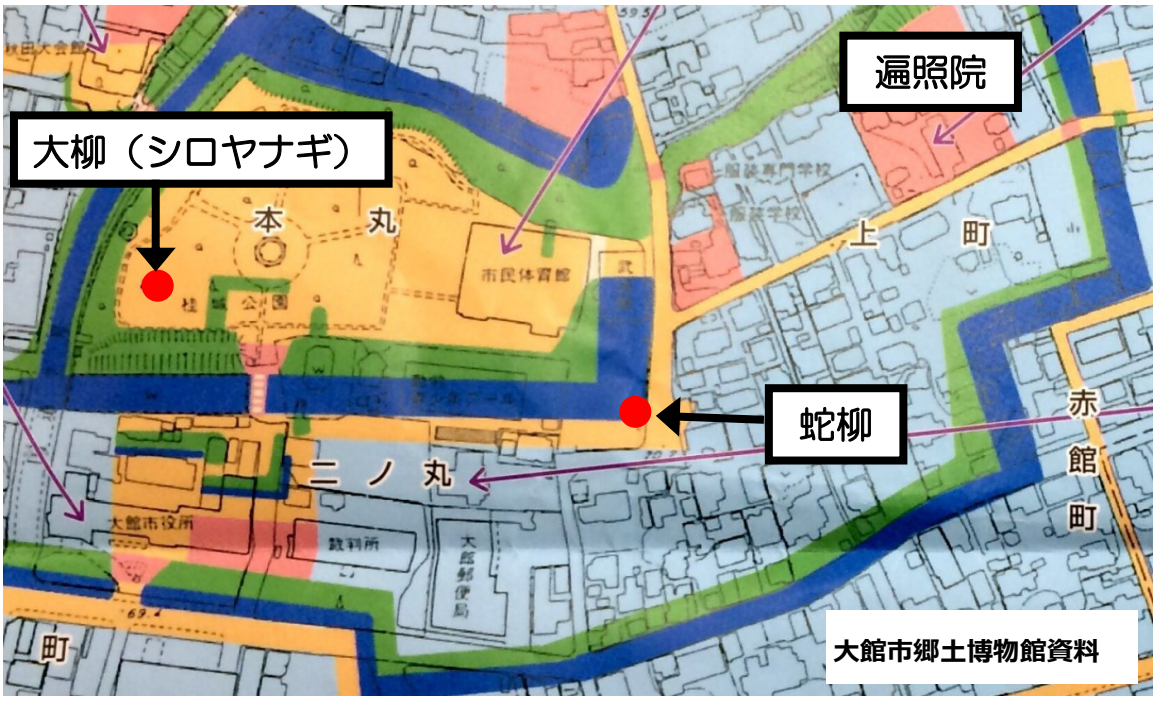
そこで調べてみると、**『シロヤナギ（別名 エゾシロヤナギ　Salix jessoensis ）』**とは別に**『ジャヤナギ（別称 オオシロヤナギ　学名：Salix eriocarpa）』**というヤナギがあることが判明した。ならば駐車場の『蛇柳』は、もしかして樹種としての『ジャヤナギ』だったのではないか、固有名詞ではなかったのではないかという疑問が湧く。（以降**『蛇柳』と『ジャヤナギ』を区別して書く**ことにする）

ジャヤナギという和名をつけた白井光太郎博士（1863～1932）は、高野山でこのヤナギを採取し地元での呼び名から命名したという。

実は高野山の奥の院、弘法大師空海の廟所に向かう途中に、覚鑁上人を祀った密厳院がある。その手前、**『こうや七不思議』といわれる覚鑁坂**（かくばんさか）近くの**『蛇柳供養塔』**には、高野山にいた大蛇が空海の術によりヤナギに姿を変えられたという逸話が残されているのである。

> 「蛇柳 渓流の畔にあり。いにしへは大蛇ありて妖をなす。時に大師持呪したまひければ、大蛇忽（たちまち）他所にうつりて、其跡に柳生ぜり。因て此名ありといふ。一説に、遠く是を望めば蜿蜒梟娜（えんえんじょうだ）として、百蛇の逶迤（いい）するがごとし。因て名づくといふ。猶尋ぬべし。」
> 『紀伊国名所図会』三編、六之巻（天保九年発行）高野山の部

表



遍照院の属する**真言宗智山派**は、空海以来の天才と言われた**真言宗中興の祖、興教大師覚鑁**（かくばん）が、平安時代に堕落した高野山から分かれて興した新義真言宗である。

また、秋田市の久保田城址（現千秋公園）の裏鬼門、木内百貨店の向かい側、穴門堀の角あたりにも蛇柳があったといい、**『雄柳大龍王尊』**の社は公園内の八幡秋田神社に遷されているが、蛇柳は失われて久しい。大館の蛇柳もそこから持ってきたものらしいのだが、遍照院の境内にも**『龍神大菩薩』**が祀られていることから、堀周りに幾本か植えられたヤナギが、高野山の蛇柳に因（ちな）んで信仰を得たという可能性は高いと思われる。

大館鳳鳴高校に平成以前に奉職しておられた化学の菅原義行教諭が、「この**蛇柳のあたりに戊辰戦争の時、300体もの死体が積まれた**のだ」と言っていたので、古地図に現在の地図を重ねたもので確認すると、なるほど東堀で延焼が止まったのならば、堀外の駐車場の南から道にかけてのあたりが急場の焼け出しに利用されたことはうなずける話である。

ところで、すべてのヤナギは雌雄異株なのだが、**『ジャヤナギ』は全国で雌株しか確認されておらず、枝が落ちるなどの挿し木などで増えたクローン**なのだという。『蛇柳』が文字通り樹種も『ジャヤナギ』であるならば、まさに高野山の蛇柳の子孫かもしれないというのも興味深い。

また、ジャヤナギではなく、大柳と同様のシロヤナギであった場合は、大柳も堀外で戊辰の役の災禍を生き延びたうちの1本であるという可能性が生じる。それを知ってか知らずか、神谷校長が本丸跡に建てる校舎という記念に堀外から持ってきたとなれば、記念樹にはめずらしいヤナギを移植した理由も解明する。それを証明することは難しいが、150年の時を経て戊辰戦争を見届けた現在唯一の生き証人であるかもしれぬ巨木は、そうした夢をわれわれに見せてくれるのである。

【後記】

現時点で『蛇柳』の種別確定には至っていないが、葉などを比較してみると大柳とそっくりに見える。しかし、柳の同定は素人ができるようなものではないらしいため、断定はせず推理に留めおきたい。

大柳については、石田 清 弘前大学准教授から、『大ヤナギ』の方はジャヤナギではなく間違いなくシロヤナギであること、また『蛇柳』の種の同定については、開花期（4～5月）の花を採取して腺体の形態を調べなければ判断できないとの御返事をいただいている。

裏